

「育てにくい」子どもを持つ母親との面接過程

山下京子

(2002年10月9日 受理)

A case study: the counseling process of a mother with a 'difficult' child

Kyoko YAMASHITA

Abstract

I carried out 39 sessions of counseling during a period of about 1 year and 5 months with a mother worried about how to bring up her elementary school age boy. I introduced the process of the counseling, and gave consideration to psychological change of the mother and behavioral change of the boy. The boy has been moody since he was a small child, and the mother had formed the impression that her son was a 'difficult' child. The boy had experienced the appearance, disappearance and re-appearance of a nervous tic, which cycle had been repeated since he entered elementary school, and tended to show physical symptoms of anxiety and tension. I supported her childcare by carrying out counseling with her, and she came to reflect on her own childcare. At the same time, the father started to become involved with his son in a positive manner. Initially a clear tendency was seen that the boy acted out his emotions, but gradually he became able to put his emotions into words.

1. はじめに

ここに提出する事例は、小学生男児の養育に悩む母親との面接過程である。何らかの子どもの問題行動が生じると、家庭における養育にその原因を求められがちであり、その多くは母親の養育態度の問題点に目を向けられがちである。母親が変化することで、子どもの状態が良くも悪くもなるという現実が、子どもの問題は母親の育て方によるという認識を強固なものにしている。しかしながら、家庭をひとつのシステムと考えるならば、母親だけでなく、むしろ父親の積極的な子育てへのかかわりが、重要な要因となると考えられる。本事例は、子どもの問題をきっかけにして、母親が自分の子育てを振り返ると共に、父親が積極的に子どもにかかわるようになったケースである。約1年5ヶ月にわたって行われた面接の経過を紹介し、母親を中心とした家族の心理力動の変化について検討を加えたい。

2. 事例の概要

面接対象者：A（小学校3年生男児）の母親。

家族歴：Aの父親は婿養子で、結婚後母親の実家の敷地内に母屋と棟続きに家建て、母方祖母と同居している。祖母は農業に従事しており、母親も手伝っているが、食事は別々にしている。Aは第1子で、2歳下に弟Bがいる。父親は職業柄、不在がちであり、母親はパート勤務をしている。住居地は、地域色の濃い土地柄であり、近所とは、昔からの付き合いが続いており、小学校の保護者に、母親と幼なじみが多くいる。母親は生まれてからこの土地を離れたことがない。

Aの生育歴：乳児期に目立った問題はない。幼児期のころから、母親はAを「気難しい」「感情の起伏が激しい」と感じていた。幼稚園へ2年保育で通うが、友達ができにくく、友達の輪の中に入りにくかった。幼稚園年長組から小学校2年生まで「自家中毒」と言われた。小学校入学後、チック（瞬きをする）が出ていたが、1,2週間で消失した。

来談への経緯：Aの通っている小学校の教頭、1年生担任教諭より、Aの母親の面接をして欲しいと筆者（以下 Co. と略）に依頼がある。教頭、1年生担任教諭によると、1年生男児Cの身体に傷があることに1年生担任が気づき、Aの弟B（Cと同じクラス）に聞くと、A・B兄弟とCと一緒に遊んでいる時に、AがCをいじめで怪我をさせたことがわかる。すぐに1年生担任がAを呼んで問いただしたところ、Aは笑いながら怪我をさせたことを認め、担任が理由を尋ねると、「おもしろいから」と答える。学校からAの保護者宅に連絡し、Aの母親にカウンセリングを受けるように勧めた。

Aの担任からの情報：学校では目立たない存在であり、問題行動を起こしたことはない児童。成績は中程度。同級生男子のほとんどが参加している地域のスポーツクラブへは参加していない。

3. 面接経過

Aが小学3年生2学期から4年生3学期末まで、約1年5ヶ月の間に39回の面接を母親に対して行った。面接は、週1回50分間で実施され、39回で終結した。この終結は、Co.の任用期間によるものであり、面接開始時にCo.から母親に対して面接期間の期限について説明し、了承を得ている。面接経過を5期に分けて報告する。

1) 第1期 (A 3年2学期: #1~4)

#1 母親が来談。Co.の前で、涙を流しながら、今回のことや、これまでのAの育ちについて母親としての想いを語った。

今回の出来事に関しては、その日のうちに弟Bから報告を受け、すぐにC宅へ謝罪に行った。いつか大変なことになると思っていた。幼稚園のころから、「難しい」「感情の起伏が激しい」子どもで、泣き出すと1時間も暴れ回って泣くなど、母親は「扱いにくい子ども」と感じていた。幼稚園は2年保育で、園では目立たず、友達の輪から外れてしまいがち。近所の同年齢の女児とままごとをすることが多かった。小学校入学後も、他の男児の好む運動遊びを嫌って仲間に入らず、現在も同級生男児と遊ぶことはほとんどなく、自宅に遊びに来た弟の同級生と遊ぶことが多い。絵を描くのが好きで、テレビアニメの絵を描いたりしている。

Aが、いらいらしているのがわかる。感情のはけ口を、弟と父親に向ける。父親に対しても、気に入らないと、父親の手を払いのけて叩くことがある。父親が冗談を言ってもAに通じず、弟のBは父親に甘えるが、Aは甘え方を知らず、つい父親も弟の方を可愛がってしまう。Aは、「自分はこれだけしているのに弟はしない。」「自分にはごめんねを言わせて、弟には言わせない。」と不満を言うことがある。父親は、不規則な勤務で、不在がち。休日に変則的で、父親の不在がちなことについては、近所の人からあれこれと言われている。

Co.から、Aと父親の触れ合う機会を作ることを提案し、今後、Aの育て方について一緒に考えたいので継続的に来談してはどうかと勧めた。母親は面接の継続に積極的に応じた。

#2 弟の担任から、「夫婦仲、嫁姑の仲が悪くて問題行動を起こした子どもがいる」と聞いて、Aに「お父さんとお母さんの仲がいい？」と聞くと、「悪いと思う。喧嘩する。」と言われた。実際、子どもの前でよく夫婦喧嘩をする。Aに母親と父親の嫌いなところを聞くと、母親については「がみがみ言う」、父親については「相手をしてくれない」であった。好きなところを聞くと、母親については黙って答えなかったが、父親については、「お土産を買ってきてくれるところ」と答えた。父親と相談して、父親が在宅している時は、父親とAの二人で入浴するようにした。すると、Aが「お父さんが好き」「日曜日、お父さんがいなくて残念」と言うようになった。

いつかこういうことになると思っていた。(Co.が「具体的には？」と尋ねると) 限度を知らない、道をそれる感じがする、登校拒否になるんじゃないかと思っていた。父親は楽天的に考えているが、Aに冗談が通じにくい点に関しては、以前から「何でかなあ。よその子ども皆こうなんかな。」と言っている。(Co.「登校し難い感じはあるのか?」) 瞬きチックが小学校入学時に出て、担任に相談したことがある。チックは1,2週間で消失した。幼稚園年長組から小2まで自家中毒と言われた。極端に恥ずかしがりやのところがあり、他人に挨拶ができず、学校でも

静かでものを言わない。その一方で、店の中で急に大声を出すこともある。Aにカウンセリングを受けていることは話している。父親は、「カウンセリングでどんなんや。」と興味を持っている。

3 Aが怪我をさせたCの家族と付き合いが再開されたことや、父親とAの養育に関して話し合ったことが話題となった。

昨日、Bの友達のC、D（男児）が遊びに来ていて、Aも一緒に4人で遊んでいた。Aに「どうだった？」と聞くと、Aは「ちょっとひどいことを言ったと思う。」と答えた。夕方迎えに来たCの父親に「遊びに来てもらって嬉しい。」と話した。

父親とゆっくり話し合った。「自分が悪者になっている。」と言う父親に対して、母親は「そうじゃない。二人で話し合って、無理はせんでいいと言われている。子どもが父親を必要としている。」と話した。二人で話し合って、父親が帰宅後、1回はAの身体に触れることを決めた。父親がAをひざの上に乗せるようになった。

Bに、瞬きチックが始まった。Aにたたかれてから、調子が悪いと言っている。「目がよう見えんから学校に行きたくない。」と言う。母親は、両親の関心がAに向いていることと関係しているのではないかと理解している。

父親が不在の時、母子3人で入浴しているが、AがBの身体を洗ってやるようになった。Aから、「お母さんが怒らんようになった。注意を良くする。」と言われる。これでいいんだろうか？（Co. はこれを支持する）。

4 Aは、小さいころから変わった遊びが好き。テレビやビデオの影響を受けやすく、気に入った場面を絵に描いたり、キャラクターと同じ格好をして、弟を追いかける。母親自身ホラー映画が好きで、以前Aがビデオを見て真似をしていたので、父親と話し合って、ホラー映画のビデオを片付けたことがある。

よその子と比較するからかもしれないがAは、家では自分を出せるのに、何故外で自分を出せないか不思議に思う。夫婦で「学校でようせんくせに」とAに皮肉を言ってしまうこともある。近所の人からは、Aのことを「ものを言わない子」「変わっている子」と言われ、出会っても挨拶しないAに対して直接、「おはようくらい言わんにゃあ。」と言われることもある。また、母親に対して「母親が喋りすぎるから、Aがものを言わんのじゃないか。」と言われたこともある。

Aは外に出るとよく手をつなぎたがる。近所の人に会うと、母親は何か言われるのではないかと心配で、Aの手を振りほども、近所の人が行ってしまったからAの手を握ったりしている。Aは「つないでくれる時と、くれん時があるのはなぜ？」と聞く。自分は、Aの養育について、近所の人と言われるままにフラフラしていたと思う。Bはチックが続いている。友達が

遊びに来てくれなくなった事を気にかけている様子。

2) 第2期 (A 3年3学期: #5~10)

#5 冬休みをはさんで、約1ヶ月後の面接。休み中のAの様子が語られた。

年末、年始で、親戚が泊まりがけで遊びに来たり、家族で父親の実家に行ったりした。いつもよりも弟に対して暴言を吐くので、母親がAに「言葉が悪いよ。」と注意すると、Aは、「人が家へ来たり、よそへ行くと気分がハイになる。」と言い、「よくならんかもしれん。」と答えた。父方祖母はAのことを気にかけて、よく電話をくれるが、これまでは電話口にも出なかったAが、電話に出て、聞かれたことには答えるようになった。また、近所の親戚からは、話しかけると返事が返って来るようになったと言われた。

正月に、いとこ達と一緒に玩具屋へ行った。何軒か見て回ろうということにしていたが、1軒目の玩具屋で、いとこ達はゲームソフトを買い、Aもソフトを買った。夕方遅くなってしまって、夕食の準備もあるので帰ろうということになったが、Aは納得できず、「皆が勝手なことばかり言う。僕は買いたくなかったのに、皆が買うから買った。」と言う。あまりに聞き分けがないので、母親がAを叩くと、泣き出した。いつもなら手のつけようなくなるが、その時はいとこたちが一緒だったためか、自宅に戻ってしばらくすると、何事もなかったように、いとこたちの仲間に入っていた。冬休みには、父親がAと弟を公園に連れて行ってきて、Aは大喜びで帰ってきた。

今回、母親は、「これまではすぐにAを叩いていたが、最近はあまり叩かなくなった。」とCo.に打ち明けた。

#6 新学期に入って、弟の友達が遊びに来るようになった。Aは自分からは入っていかず、母親が遊んだらと言うと、すーっと入る。先日、久しぶりにレンタルビデオ屋へ行った。Aは、推理探偵物のビデオを見つけて借りたいと言う。母親が、「まねをするから駄目。」と止めたが、「絵を描くだけでまねはしない。」と言い張り、ビデオを借りた。(Co.「そのシリーズのどこが好きなのだろうか?」)キャラクターがおもしろいのではないかと思う。ビデオで気に入った場面を止めて、絵を描いたり、真似をする。

Aは、お金が欲しいとよく言う。二万円する腹話術の人形を欲しがっている。買ってどうするのかと聞くと、持って眠ると答える。変わったものを欲しがると子だと思ふ。(Co.「もし手に入れて持って眠って、それでどうなるのか聞いてみたい。」と応じる。)

#7 これまで1回も家族旅行をしたことがなかったので、父親が仕事を休んで、日帰り旅行をした。Aはとても喜んで、バスの中で父親と内緒話をしていた。妻く楽しかったので、父親とも近くでゆっくりできるところへ行こうと言っている。

近所の人から、「Aは父親と遊んでいるとき、すごく嬉しそう。」と言われた。最近Aが「お父さんに僕のために～しろと言ったじゃろう。」という。母親が言ったこともあるし言わなかったこともある。

気分の起伏が激しい。前は理由がわからなかったが、今は理由がわかる。推理探偵物シリーズの好きな理由をAに聞いてみた。「わくわくする。犯人は誰かと思ったり、キャラクターが変わるところ。」母親が殺人場面について、「人を刺しているのを見て、すっとしたり本当にやってみたいなと思うのではないか？」と尋ねると、Aは「そんなんするわけじゃないか。」と答えた。弟は「やってみたい。おもしろい。」と言った。また、腹話術の人形が欲しい理由を尋ねると、「ずっといいなと思っていた。腹話術はテレビで見て知っていた。お母さんと一緒に腹話術をやる。」と言う。3年生にもなって、人形を持って眠るのかとAに言ったので、腹話術をやると言っているのだと思う。Aは、小さいころから、気に入ったものを持ってベッドへ行っていた。

#8 Aがいらいらしている。母親がテレビに夢中になっていると、「僕の話聞いていない。最近すぐ怒る。」と言う。パート先から帰ってきたら、何もかもやりっぱなしで散らかっているののでつい怒ってしまう。

珍しくAの同級生3人が遊びに来て、近くの山へ出かけて行った。Aは「楽しかった。」と喜んで帰ってきた。他の日は、弟の同級生と一緒に遊んでいた。汽車ごっこをして遊んでいる時に、弟の同級生の前で、弟に「おねしょしたこと言うよ。」「テストの点言うよ。」と脅すので、母親が「Aもおねしょしたことやテストの点を言うよ。」と言ってしまった。

今回の面接は、これまでに比べて、母親が随分と疲れた様子であった。

#9 インフルエンザによる学校閉鎖が続いているので、兄弟で遊んでいる。近所に、Aと同級生の男児Eがいるが、一緒に遊ぶことはしない。AはEを嫌っており、2年生の時、「バカ」「ボケ」と言われてひどく気にしている。当時、Aはそのことで学校へ行きたくないと言っていたが、母親は、このくらいのことでと担任には相談しなかった。

Aが「明日学校へ行きたくないなと思ったら、本当に休みにになった。」と言うと、弟が「学校で遊ぶ友達がおらんからじゃろう。」と応じ、Aは「そんなことない。」と否定した。母親は、思わず「ひとりなん？」と聞いてしまった。Aは否定したが、母親は、遠足など、一人で弁当を食べているのではないかと想像して不安になる。

#10 Aが、「学校行きたくないなあ。」「お母さんだけに教えてあげる。休みが多くて行きたくない。」と打ち明けてくれた。母親は、「行きたくないのに頑張って行っていたんだね。」と応じる。

日曜日、家族4人で公園に行った。父親は、「お父さんがいるから行きたい」というAの思い

を先にしてくれず、公園に着くとすぐにうどんを食べに行ってしまった。また、Aに冗談は通じにくいのに、Aをわざと怒らせるようなことを言う。

参観日で、Aのクラスはサッカーで、Aはぼーっと突っ立っていた。帰宅後、父親に「お父さんが教えてやらないから。」と文句を言ったが、Aに尋ねると、「ゴールキーパーだった。」と言われ、聞いてみるものだと思った。自分は何でも父親のせいになっているみたい。自分の方がカリカリしている。父親からも、「おまえ一人でカリカリしている。」と言われた。

3) 第3期 (A 4年1学期: #11~20)

春休みが終わり、Aは4年生に進級した。クラスは持ち上がりで、担任教諭のみ変更があった。

#11 休み明けには、いつも「あと何日しかない」「行きたくない」と言うのに、今回は、「担任の先生は誰になるのかな。」とだけ言った。新しい担任の先生(男性)については、「ものすごくやさしい」と喜んでいた。

母親がこれまでプレッシャーをかけていたのかもしれない。「友達がたくさんできますように。学校へ頑張って行きますように。」とお寺にお参りをしていた。今年はパートがひとつ増えて家事のことで頭がいっぱいになり、お参りもしていない。子ども達は、「僕らは留守番ばかり」とぼやいている。

朝は相変わらず寝起きが悪く、機嫌が悪い。先日、遊びに来ていた弟の同級生Dが小石を投げ、Aがやめると言っても投げ続けるので、Aが怒って暴言を吐いたり、たたいたりした。Dは「怖くて遊びに行かれん」と学校で報告し、それを知った母親が、Aに尋ねると、「僕はあのときのことを忘れそうだ。」と言う。自分で「ごめんね。」とDにあやませた。

#12 先週から調子が悪く、いらついている。町内の運動会に家族で参加したが、Aは「むかつく」と弟をたたく。「人前で平気で弟をいじめる。恥ずかしいと思わんか。」と母親が怒ると、「思わん。弟は甘えている。泣いたらお母さんが来てくれると思っている。帰る。」と言って本当に自宅に帰ってしまった。父親と相談し、お昼までそのままにして置こうということになった。昼に一旦帰宅すると、Aはひとりでふりかけご飯を食べていた。「お母さんはご飯まだ？」と聞くので、「まだ」と答えると、「一緒に食べる。運動会に行く。」と言って、会場に戻った。ところが会場では、弁当のおかずにつけてばかりいる。Aは自分のことを「気持ちが悪くて」と言う。

朝、弟の足をけったり、機嫌悪く、母親が怒って、「学校へ行きたくないなら行かんでいい。」とAをリビングから押し出した。その時に揉み合いになって、Aは脇腹と肩を打った。母親も手の甲が内出血し、紫色に変色した。Aは「お母さんが怒ってけがをさせた。」と言う。Aの気

持ちの持って行き場がない。母親が「どうしていらいらするのか。」と聞くと、Aは弟が泣くことと、母親が怒ることを挙げた。

#13 朝あまりに機嫌が悪いので、母親が怒って叩くと、Aは泣いた。怒ると泣いてしまう。口が回るのに、母親が「何でいらいらする？」と聞くと黙っている。

Aが怖い夢を見た。「人形を布団の横において寝たのによその部屋に寝ていた。」続けて2回見たと言う。「怖い夢を見たのに、欲しいのだろうか？」と思う。

Aの方から急に、社会見学に行くのに「リュックが欲しい。」と言い出した。母親は、同級生がスポーツメーカーのリュックを持っているのに、漫画入りで恥ずかしくないんだろうかと思っていた。Aはまた同級生が履いている紐靴も欲しいと自分から言った。

母親の誕生日に、ラッキーカード(肩たたき券)と母親の絵をプレゼントしてくれた。母親は、嬉しそうに持参した絵をCo.に見せた。

#14 リュックを見に行ったがなかなか決まらない。結局買わずに帰宅し、漫画入りのリュックに荷物を詰めて眠ったが、朝になってから「どうしよう。」と言う。母親の黒色のリュックに詰め替えて見学に行った。「とても楽しかった。」と見学から喜んで帰宅した。

朝、機嫌の悪さは相変わらず。母親がこんなものだとほおって置くと、意外に何事もなかったかのようにスムーズに行く。今朝も弟を傘で突っついているのを母親が見つけて、傘を取り上げてAの頭を軽くたたいてしまった。ぷーっとむくれるのが分かったが、「ハイ。傘。」と言って傘を出すと、にやっと笑って受け取り、そのまま登校した。

父親の携帯電話が通じないことが原因で、夫婦喧嘩をした。父親は自分の友人には携帯電話をかけるのに自宅にはかけず、そのことでAがいらいらしてしまうと口喧嘩になった。祖母が「子どもの前で喧嘩する。」と怒り、父親はひとり2階へ上がり、本を投げつける音がした。Aは仏様を拝もうと言い出し、「500円玉がたまるように。家族仲良く喧嘩せんように。」と祈った。父親とAは、親戚からグローブセットをもらって、キャッチボールをするようになった。

人形について、母親が「Co.がどんな人形なんか見たいと言っていた。」と話すと、Aは怒って「そんなこと言ったんか。一緒に寝ると言うのは言わなかったろうね。」というので言わなかったと答えた。秘密にして置きたかったのだろうか。人形は高いので、買うのは止めようかと言っている。

#15 父親が仕事で不在で、キャッチボールができない。母子3人でドッチボールをする。母親としては、もう少しゆとりがあればいいのと思う。Aは一つのことに夢中になり、思い通りに行かないと怒り出す。ドッチボールをしていて、怒ってしまう時と「明日もやるうね」と言う日がある。(Co.「どういうときにそうなるのか?」)弟がむくれない時、近所の人がない時に機嫌が良い。近所の人があると、母親に話しかけるのでゲームが中断されるのをいやがる。

先日、食事の席で揉めた。3人の時は兄弟が並んですわり、向かい側の席に母親が座る。父親がいる時は、A、B、母親と並んで座り、向かい側に父親が一人で座る。Aが母親にAとBの間に座って欲しいと言う。テレビの位置の関係で、Aと父親、Bと母親で並んで座ろうと言うと、泣き出してしまった。Aは怒るかと思えば泣く。泣きながらご飯を食べた。

#16 食卓の件について、母親から「真ん中に行こうか。」と言ったが、Aから「いい。」と言われた。朝仕度が間に合わず、いつもなら怒って弟をけったり叩いたりするのに、「早く行こう。」と弟の手を引っ張って走って行った。子ども達が学校から帰ってくる時間、パートに出ていて母親が留守にするので、置き手紙をしている。「帰ったら宿題をされていてね」と書いておくと、2人で宿題をしていた。日曜日に外出しても、何もなかった。「あれ？」と言う感じだった。父親が在宅している時は、Aと父親とでキャッチボールをしている。Aは直接父親を誘わず、父親の方がAに気付いて誘っている。

近所の庭先で、弟の同級生のC一家とD一家も参加してバーベキューをしていた。Aはむかつくと言う。A：「いつもCやDは遊びに来るのに、寄せてくれんのか。腹が立つ。」母親としては、特にDの母親に言にくい。AがCに怪我をさせた時に、Dの母親から「B君はいいんだけど。」と何度も言われて、Aのことを敬遠しているように感じられた。祖母も、「家でバーベキューする時はDは来るのに、なんで呼んでくれんのかねえ。呼んでくれてもいいのに。」とA同様、不満を漏らしていた。

#17 いい時もあれば悪い時もある。祖母に対して、部屋を汚すと怒られたり、猫を入れないように注意されるとむかつくと言うが、畑仕事を良く手伝う。Aの態度がころころ変わる。

父親が花火にAを誘った。「さすがA君や」と言っているのを聞いて、自分は「お兄ちゃん」と言っていることに気付いた。

Aは、人付き合いが苦手。クラス中、スポーツの話題で盛り上がっているが、Aは「黙って聞いている。わからんもん。」と言う。

#18 Aには、気分の波がある。Aが誕生日に買って欲しいと言っていたツリ竿を買った。一家で、車で沼へ行行って、魚を釣った。小さい魚がたくさん釣れて、Aはとても喜んでしたが、父親は釣りの途中で車に戻り、横になってしまう。Aは「お父さんは本当は行きたくなかったんよ。」と機嫌が悪くなる。Aと父親二人で出かけることもあり、そういう時はAは嬉しそうにしている。

夜、弟が奇声を上げて、Aが「うるさい。」と言って弟を叩き、急にAの機嫌が悪くなった。母親が「どうかしたのか？お母さんや弟が何かしたか？」と尋ねると、「いらいらする。」と怒り出す。が、その後、「わからん。」と言ってしくしく泣き出した。Aは「お母さんも急に怒り出す。」と言う。Aが、「学校じゃ何もできんくせに。」と弟をけなすこともあった。母親が「A

だってそう。」と言うと、黙って聞いていた。

#19 冗談の通じにくい子だが、今朝は楽しい話で結構笑った。カブトムシとザリガニがたくさんいるので人にあげようということになったが、カブトムシの幼虫を欲しい人はいたが、ザリガニはいらないと言われた。「幼虫には、もれなくザリガニがついていますと言おうか。」と母親が言うと、Aは笑った。

Aから、学校で出し物をする事、25m泳げるようになったことを話してくれた。とても喜んでいて。出し物のことで友人から電話があり、Aにも電話があるんだと母親は驚いた。

父親から、「釣りに行こう」と電話があり、夜8時まで連絡して、待ち合わせをすることになった。ところが、Aが何度も電話したが通じず、翌朝、父親は自宅に戻って来た。Aはしくしく泣いていたが、父親が頑張ってくれた。普段は入浴後眠るのに、近くの川に変更して釣りに連れて行ってくれ、眠いとか疲れたとか言わずに、Aに付き合った。父親とAが入浴している間、二人の笑い声がするようになった。

#20 父親が仕事に出発する日、Aは大泣きした。Aは、父親の休みの日に出かけるのを楽しみにしている。

夏休みの計画を立てている。「楽しく過ごそうね。」と母子で言っている。キャンプ、釣り、水泳を予定している。去年は友人家族と一緒にキャンプに行った。友人はバーベキューセット一式を持っている。いつでも貸してあげると言われているが、自分からは言いにくい。

Co.「Aくんと同じですね。」母親：「そうなんです。よく似ているんです。」

4) 第4期 (A 4年2学期：#21~38)

#21 夏休み中、Aはずっと機嫌悪く、毎日いらいらしていた。母親も身体的に疲れていて、大変な毎日だった。

キャンプは、父親が仕事から帰ってきてから出かけようということにしていた。昼間に海を見に行ったら、Aが貝堀をしたいと言いついて、母親がキャンプの準備をしないといけなくて時間がないと言っても、Aはギャーギャー大騒ぎして、結局貝堀をした。その後、疲れて母子とも眠ってしまい、帰宅した父親に「行くか。」と聞かれても、Aは「行かん。」と言った。翌日、海へバーベキューセットを持って行った。

公園へ遊びに行くと、パターゴルフができないとわかるとAが怒ってどんどん先を進んだ。ほおって置くと、そばに来て何もなかったように「ねえお母さん。」と言って来た。母親は、Aに対して無性に腹が立った。(Co.「気分の切り替えが自分でできるようになってきた。」と肯定的に評価した。)

Aが、腹話術の人形ではなく、キャラクターの骸骨人形2体買った。母親は午前中のパート

を辞め、ゆとりを持てるようになった。

#22 キャラクターの骸骨人形を持参。Aに「Co.に見せてもいいか。」と尋ねると、「いい。」と言ったので持って来たという。先週は、毎晩、Aと一緒に漢字の練習をした。

Aが弟の友達C、Dを呼び捨てにするので、母親が友達に「Aが呼び捨てにしたら、せんでと言って欲しい。」と頼んだが、「後が怖いもん。」と言われた。あのことが尾を引いているのではないかと思う。

知り合いの小学1年生のいる家が、兄弟を飯盒に誘ってくれた。その家の人から、Aが弟のBを仲間はずれにしている感じがしたと言われた。後でAに尋ねると、Aは弟の方が来ないと言った。家では、弟の方は、父親にもぶれついているが、Aはひとりでテレビを見たり、絵を描いたりしている。甘え下手と思う。

#23 前半1週間は良かったが、後半1週間は「むかつく」「腹が立つ」「おもしろくない」の連発だった。遊んでいる時はいいが、帰りには「無性に腹が立ってきた」「全然面白くない」と文句を言う。Aの機嫌がころころ変わる。弟が友達のところへ遊びに行くことも多く、Aひとりになって、かわいそうに思った。父親は、Aをキャッチボールに誘うなど、一生懸命関わるが、それにAがのってこず、父親に対して「うるさい」「黙れ」と悪態をつく。

母親は朝からいらいらしてしまう。いつも同じことの繰り返しで、つい意地悪をして弟の方をかまってしまう。Aは「Bにばかりやさしい。」と言う。こういうことはわかる。Aは少しも変わらない。私の進歩がないんだろうか？

#24 最初の1週間はAの機嫌が悪く、Aをつかまえて逃げられないようにして叱った。Aは泣いたが、その後くすくす笑う。一体どうなっているのか、気になる。Aは「明日から機嫌良くする。」と言い、実際その後1週間は平穏だった。

母子で卓球にこっていて、毎晩テーブルを台にして卓球をしている。思い通りにゲームが進まない、Aはいらいらするが、あまり暴言も吐かず、落ち着いていた。

先日、Aが転んで頭に怪我をした。朝、病院へ行って、遅れて登校すると、級友が「**くんが来た！」と寄ってきた。「ああ**くんと呼ばれているんだ。存在感があるんだ。」と思うと、嬉しくなった。

#25 卓球を一生懸命している。「何かいらいらする。」と言うが、卓球をしている時は、いらいらしない。今朝、Aの機嫌が悪く、味噌汁の具のことで文句を言うので、叱った。Aは泣き出してしまった。

子ども達の間でカード交換が流行っている。弟の友達C、Dが遊びに来て、Aも一緒にカード交換をしていた。近所の同級生のEが遊びに来て、Aとカードの交換をした日もあった。Aは、相手がEだと、言われるままに交換し、同級生には無理をしてサービスしているように見

える。

#26 卓球を続けている。気分の波がある。「いらいらするならボールをけったら。」と母親が言うと、庭先の鉢をボールで全て割ってしまった。弟に当たり、暴力を振るったり、弟の怒るような事を言うことが多い。弟が友達のところへ遊びに行つてひとりになると、「むかつく」と言っている。

父親の仕事が忙しく不在がちで、母子で公園へ遊びに行った。父親と子どもが遊んでいると、兄弟でじっと見つめていた。うらやましいのだろうと思う。

Aの描いた読書感想画が公民館に張り出され、見に行った。母親は、「上手に書いてあった。」と嬉しそうにCo.に報告した。

#27 卓球を毎晩している。夜、「いらいらするので寝ます」とAから置き手紙があったり、「ふくれんから卓球する？」と反省するようなことを言う。朝落ち着いて出ることも多くなった。父親がいると会話がスムーズに行かない。Aが話していると、急に父親が仕事の話をする。夕食の時、Aが父親に対して「うるせえ。」と言うと、父親が「誰にもものを言っているのか。」と怒った。するとAはしくしく泣き出した。父親がいるだけでむかつくと言う。「本当は話したいように見えるよ。」と母親が言っても、「全然そんなことはない。」とそっけない。

Aの絵が美術展に入選したが、同級生の方がAよりも良い賞を取ったことがぐちゃしくて、「自分の絵のどこがいけなかったんだろうか。」としきりに尋ねてくる。

#28 この1週間落ち着いていた。父親にAの方から話しかけていたが、翌日には泣いて、「お父さんはしつこい。腹が立ってきた。」と言う。次の日も父親はこりずにAにちょっかいを出していた。Aはしつこいのが嫌い。ふざけるのも嫌う。しかし、父親が仕事に出かけると、Aは「やっぱりお父さんがおった方がええネ。」と言った。

母子で、カードを買いに行った。弟の方がいいカードがそろっていて、Aは弟の機嫌を取りながら、自分のカードと交換するように頼んでいた。弟は、渋々承知していたが、帰宅後、「兄ちゃんが取った。」と騒ぎ出した。母親が「あげると言ったんだから、取ったんじゃない。」と弟をなだめたところ、Aの「いつもぼくばかり」というのがなかった。カード交換は、友達の間でも流行っていて、Aの同級生が自宅に来て交換していた。「これいい？」と聞かれると「うん」と言うばかりで、嫌と言えないのではないかと思う。

今朝、母親が「カウンセリングへ行くけど、1週間どうだったか？」と聞いてみた。Aは、「悪かったと思う。弟を叩いたりせんと思うんじゃないけど叩いてしまう。」と答えた。Aが、「弟をたたきたくなる気持ちわかるじゃろ。」と言うが、弟の気持ちを思うと、どう答えていいかわからない。

#29 落ち着いている。いらいらすると言わない。時々かーとなった時に「むかつく」と

言って、弟を叩いたりする。

Aとバレーボールをしているところに父親が帰宅した。「もう少しやりたい。」と言うAを残して母親が家に入った。Aはそばにあった物を投げつけ、それを見ていた父親がAとバレーボールをしてくれた。母親が何も言わないのに、父親が察してやってくれた。父親に、朝Aにしつこく言うのをAが嫌がっていることを伝えた。

Aはテレビのチャンネルを変えるとき、父親に何か言われると泣いてしまう。父母が弟の味方についているように感じているらしい。「お兄ちゃんだから。弟がいるから。」とずっと言い続けて来た気がする。

小学校に入ったころから、感情の出し方がこんなので良いのかと思うことがあった。自分の思い通りにならないと、転げまわって泣く。近所の人から、「変わっている」と言われることが多かった。1年生の時は登校しぶりで、友達ができず、担任がいろいろと援助してくれた。3年生くらいから落ち着いてきたように思う。

弟が自家中毒と言われている。Aも言われたことがある。弟に「何かあるじゃろう。学校おもしろくないんじゃろう。」と畳み掛けるように質問していた。弟にもそう言う悩みがあれば良いと思っているのか。Aには、1年生のころから、チックがあり、目、鼻、口など顔のどこかに出る。最近、目をキョロキョロさせるようなチックが出ている。Aは「何かあると出るんよね。」と言う。「何があるの?」と聞くと「わからん。」と答える。卓球をしている時に特に出ているように思う。

#30 週の前半か一つとなつてすぐ泣いていた。後半は割りと落ち着いている。弟に自分からちょっかいを出して、弟がやり返すとこれでもかと言うくらいひどく叩く。母親が注意すると、「弟の味方をする。」と言って、しくしく泣き出す。

父親とAが初めて二人で卓球をした。母親とAが卓球をしているところへ、父親が帰宅し、母親が用事があって少しの間離れて戻ると、父子で楽しそうに卓球をやっていた。

Aは、校内マラソン大会をひどく気にして、「どきどきする。」と言っていた。母親が「気が弱いんよね。」と言うと、「いやでたまらない。それで目がこうなる。」と言う。(Co.「何がそんなに嫌なんだろう?」)以前、途中で靴が脱げてベショベショになったことがある。「皆が見ている。」「ぬかされたら恥ずかしい。」「どきどきする。」と言う。結果は、10位だった。Aは、「終わった。ほっとした。一つ片付いた。」と安心した様子だったが、チックは残っている。

いつもは喧嘩ばかりしているが、弟の誕生日のプレゼントにカード作りを熱心に行っている。手先が器用で、本を参考にしながら、「おめでとう」のメッセージも入れた凝ったものを作っている。

#31 Aの気持ちがいらいらしている。母親が「もっと落ち着いて。」と言うと、「うるさい。」

もう治らん。治さんでいい。」と怒る。一方で、夜寝る前になると、「お母さん明日はいらいらせんで起きるから。」と殊勝なことも言う。父親は、自分に対するAの態度が変わったと言っている。以前は灰皿を取ってくれるように頼んでも、「自分で取りいや。」と相手にもされなかったが、今は「えーっ。」と言いながらも取ってくれるようになったという。

母親から見ると、父親が家にいると、Aの気分の波が激しいように思う。先日も、Aと母親二人で卓球をしていて、そばでテレビを見ていた父親が、「うるさいなあ。おまえら早くやめろ。」と言ったら、Aは泣いて2階へ駆け上がった。「だまっとして。お母さんには関係ない。」「うるさい。くそばばあ」と母親に言う一方で、こんなことくらいで泣くかと思わせるようなところもある。

Aの目のチックがひどく、「ストレスがたまっている。」と言っている。

5) 第5期 (A 4年3学期: #32~39)

#32 冬休みは宿題もなく、のんびりと過ごした。Aが弟にちょっかいを出して、これまでは弟が泣いたらすむと言う感じだったのが、弟の方が負けずにやり返すようになった。母親がAを注意すると泣く。父親はやられたらやり返せと言う方針で、母親も弟の方へは「やり返しなさい。」と言うが、Aには「いい加減にしなさい。」と言う。最近ではAに注意しようとする、Aが耳をふさぐようになった。

2学期末の保護者会で、担任から、「以前よりは自分を出せるようになってきた。絵がうまく、友人から一目置かれている。チックは学校では出ていない。」と言われた。チックは冬休みには家庭でも出なかった。

Co. が「学校ではチックはないみたいですね。」と言うと、母親はひどく驚いた様子を見せたのが、印象的であった。

#33 Aは疲れるのか、うたた寝を良くする。朝はチックは出ないが、学校から帰ってくると、顔が歪むチックが出る。担任にチックのことを聞いたとAに言うと、「エーなんて言うの。」と不服そうだった。Aは、学校でも出ていると言う。母親が「知らないうちに気を使っているんだらうね。」と言うと、Aは「よくわからない。」と答えた。学校では新しい班になり、楽しいときりに言うが、その時チックがひどく出る。最近、兄弟喧嘩になっても弟の方も負けていない。

母親の心配なこととしては、Aの感情の起伏が激しく、自分で自分の感情をコントロールできないこと、今に暴力が他人に向かうのではないかと言うことであった。

#34 これでもかと言うくらい機嫌が悪い。ゲーム機を購入するのに、弟は自分のお金で買いたいというのをAは二人のお金で買おうと主張し、兄弟喧嘩になった。結局、ゲーム機を弟、

ソフトをAが購入することに落ち着いた。

父親は子どもにいろいろ聞かすが、めったに怒る事はない。Aが小学1年生の時、謝ることができず、父親がAを外に放り出したことがある。その時、Aは大泣きした。

Aは気まぐれで、祖母とよく似ている。母親はAに振りまわされてしまって、Aに対して手が出たり、暴言を吐いたり、無視をしてしまう。

#35 兄弟仲良くゲームをやっているのに、祖母が急にゲームはさせんと言うなど、祖母の気分がころころ変わる。最近、弟の友達がたくさん来て、Aも仲間に入り、ゲームで盛り上がっている。時々、近所の同級生のEから電話がかかり、遊びに行っていないかと言われるが、Aは嫌がって断っている。

Aのここ2年間の変化としては、1、2年のころはしゃべってくれなかったが、自分の思いを口に出してくれるようになり、他人に対しても少しは心を開くようになったと思う。一方で、気分のむらが出てきた。母親にとっては、いつかAが何か大変なことをするのではないかと不安がある。「小さいころおとなしい子は将来怖いことをする。」と言って、周りの人は慰めてくれるが、Aを見てみると、もっと陰湿なことに向かうのではないかと感じてしまう。

#36 この1週間割りと落ち着いていた。キーホルダーを2個Aが購入し、1個を母親にくれた。が、母親がキーホルダーを付けようとするとう壊れてしまった。Aに謝ったが、Aは泣いてばかりで、夕食時には、ご飯茶碗を放り投げ、祖母のところへ行ってしまった。母親は、Aが出て行ってもう家には帰ってこないんじゃないか、よその子もAのようにすぐ行動に出ることがあるのだろうかと思ってしまう。(Co.「それほど、Aにとっては、とてもショックだったんだろう。」)

#37 帰宅後にAにキーホルダーのことを謝った。

母親：「すごいショックだったんだろうと Co. から言われた。」A：「家をぶち壊したくなる。かーっとなったら、窓でも割ってやろうかと思う。」母親：「家をぶち壊したら住むところなくなると思わんのか。」A：「かーっとなっている時はそんなことは思わん。」何を言ったらいいかわからず、黙ってしまった。

兄弟でバレーをしていて、Aが弟をひどく怒る。母親が行くと、「口を出すな。」と言う。弟の目がつり上がっているように感じて、「Aのせいよ。」と言ってしまった。

Aは父親を父親として認めていないんじゃないかと思う。父親に対して遠慮があるし、ちょっと何か言われただけで泣いてしまう。知り合いから、子どもの前で夫の悪口は言わないと聞いた。我が家では、すぐその場で言う。

#38 父親が「おまえには悩みがあるのか？」と聞いてきた。「友人には話せても、夫には話せないこともある。」と母親が答えると、しつこくそれは何なのかと聞く。しつこさに腹が立つ

て、喧嘩になった。夫婦で話していても、そんなことないだろうとすぐ否定するので、楽しく会話ができない。Aは落ち着いている。

#39 Aはかなり落ち着いてきた。祖母に「Aが落ち着いてきたね。」と言うと、「そうかねえ。」と言われた。チックは家ではしょっちゅうある。昨日、学校行事で、Aが皆の前できちんと挨拶ができた。それを見た時、とても感激したのに、そのことをついAに言い忘れてしまった。(Co.「今からでも話されるとどうですか。」)

近所の人から、「Aが変わったね。しっかりしてきた。」と言われた。以前から、カウンセリングに行きたいと思っていた。今にAは大変なことをするのではないかとずっと思っていた。近所の人に相談しても、「大丈夫」と社交辞令のように言われて、私の気持ちをわかってもらえなかった。

Co.から、今後のことについて、何かあったら学校へ相談すること、カウンセリングを希望すれば相談機関を紹介してもらえることを伝え、面接を終結した。

4. 考 察

1) 面接過程に見られる母親の心理的变化

第1期は、Aの起こした問題によって動揺する母親に対して、危機介入を行った時期である。近隣との濃厚な関係の残る地域に住んでいるA一家にとって、Aの起こした問題は、家庭や学校だけの問題では収まらず、地域社会で家族が孤立してしまう危険性さえ孕んでいるものであった。学校側の対応は早く、対象児童であるAと面接し、双方の保護者に連絡し、Aの母親に対してはカウンセリングを勧めると同時に、Co.へ母親面接を依頼した。このことは、結果的にA一家を近隣からの批判から救うことになったと考えられる。つまり、母親が定期的にカウンセリングに通うことは、Aの家庭に対する学校の指導の一環として、地域で理解されたからである。

本事例が、学校からカウンセリングを半ば強制された形で開始したにもかかわらず、1年5ヶ月間も継続したのは、おそらく「いつか大変なことになると思っていた」(#1)という母親の不安の大きさによるものであろう。「気難しい」、「感情の起伏が激しい」、「扱いにくい子ども」(#1)と感じさせるAに対して母親の抱く不安を、カウンセリング場面でCo.と共有することで、母親の情緒の安定化を図り、これまでのAに対する養育態度を見なおし、Aに対する心理的理解を深め、関わり方を修正することを面接方針とした。母親は、父親が不在がちであり、弟のBをかかわいがること(#1)や、夫婦仲(#2)が、Aの問題と関係しているのではないかと感じており、Co.の「Aと父親の触れ合う機会を作る」(#1)という助言は、この母親の思

いに沿う形となっている。母親は、「自分が悪者になっている」(#3)と言う父親に対して、「子どもが父親を必要としている」(#3)と説明し、夫婦で協力してAの問題に対応することを求めている。さらに、#4で、家の中とは違って、外で自分を出せないAに対して、夫婦だけでなく、近所の人からも、「ものを言わない子」「変わっている子」と言われ、近隣の目を気にしてAに対する態度を変えてしまっていたことに気付く。

第2期は、母親のAに対する養育態度を省みる時期となった。#5で、冬休みの玩具屋でのエピソードが語られ、母親はこれまでAを叩いてしつけてきたことをCo.に打ち明ける。子どもの暴力行為と親の暴力によるしつけとの関連が指摘されることは多く(例えば、宮下・大野, 2002), Aは「感情のはけ口を弟と父親に向ける」(#1)ことになっていると想像される。Co.は、母親の「これまではすぐにAを叩いていたが、最近はあまり叩かなくなった。」(#5)に対して、それほど育てにくい子どもであったのだろうと理解し、特に面接で取り上げなかった。母親は、Aの「気分の起伏が激しい」(#7)ことについて、「前は理由がわからなかったが、今は理由がわかる。」(#7)と述べており、Aの気持ちを理解しようと試みていることが伺える。それは、#10の「行きたくないのに頑張って行っていったんだね。」という母親のAに対する応答にも現れている。また、学校で遊ぶ友達がいないのではないか、遠足で一人で弁当を食べているのではないか(#9)とAの学校での様子を気遣っている。一方で、腹話術の人形を欲しがるAを「変わったものを欲しがる子」と思ったり(#6)、弟を脅すことを言うAの態度に対して、「Aもおねしょしたことやテストの点を言うよ。」と言ってしまうこともある(#8)。母親はAについていろいろと思いを巡らせており、面接場面で疲れた表情を見せ(#8)、父親に対する不満(#10)を語る。#10の参観日でのエピソードは、「自分は何でも父親のせいにしてみたい。自分の方がカリカリしている。」という母親の言葉に示されるように、母親が自分自身について省みるきっかけとなった。

第3期は、機嫌の悪いAに母親がいらついでしまう時期である。Aが弟の友達Dを叩いたり(#11)、運動会で「むかついて」弟を叩く(#12)など機嫌の悪い日が続き、母親もいらついで、Aをリビングから押し出そうとしてもみ合いになり互いに怪我をしたり(#12)、Aを怒って叩く(#13)など、手を出している。母親はAに何故いらいらするのかと問い掛けるが、Aは、弟が泣くこと、母親が怒ることを挙げることもあれば(#12)、黙っていることもあり(#13)、はっきりとしない。また、父親の携帯電話につながらずAがいらいらすると、母親もいらついで夫婦喧嘩に発展している(#14)。不機嫌なAに対して「こんなものだとほおって置くと」(#14)意外にすんなりことが運ぶのだが、母親は、Aの不機嫌と心理的距離を取りにくいように感じられる。その原因のひとつとして、母親自身のゆとりのなさを挙げるができる。母親は、農作業の傍ら、家事、子育てをし、さらにこの時期、パートをひとつ増やしてい

る（#11）。「もう少しゆとりがあればいいのと思う。」（#15）は、母親のAに対する思いであるが、母親自身のことでもあるだろう。もうひとつの理由として、Aの傷つきやすさを挙げることができる。この時期、Aは些細なことに傷つき、泣いたり怒ったりすることが報告された。例えば、母親からCo.に人形のことを話したと聞いた時（#14）、食卓の座る位置で自分の要求が通らなかった時（#15）、近所のバーベキューに誘われなかった時（#16）である。それは、Aと父親との関係でも現れ、父親の行動にAは一喜一憂している。母親もまた父親の態度に揺れ、Aの意向に沿うように接してくれた父親を「頑張ってくれた。」と評価している。Aの「お母さんも急に怒り出す。」（#18）という言葉に現れているように、Aと母親はよく似ており、母親自身も「自分からは言いにくい」点で似ていることを認めている（#20）。

第4期は、「大変な毎日だった。」（#21）という夏休みの報告から始まった。母親はパートの仕事をひとつ辞め、ゆとりを持てるように調整をするが（#21）、不機嫌なAをつい叱ってしまう。例えば、「つい意地悪をして弟の方をかまってしまう。」（#23）、「Aをつかまえて逃げられないようにして叱った。」（#24）、「味噌汁の具のことで文句を言うので叱った。」（#25）などである。その一方で、キャラクター人形を面接に持参する時には、Aの意向を尋ねる（#22）など、Aの世界を大切に扱おうとしていることが示された。また、Aを甘え下手と感じ（#22）、弟が遊びに行き一人になったAをかわいそうに思う（#23）など、Aを理解しようとしている。一生懸命Aに関わろうとしている父親を認め（#23）、それに乗ってこないAについて、「Aは少しも変わらない。私の進歩がないだろうか？」（#23）と母親が自分自身をせめてしまうこともあった。

この時期、母親は父親のAに対する関わりを、「父親がいると会話がスムーズに行かない。」（#27）「父親はこりずにAにちょっかいを出していた。」（#28）「父親が家にいるとAの気分の波が激しいように思う。」（#31）とこぼすが、父子の触れ合いを、子ども達が望んでいると理解し（#26）、Aに「本当は話したいように見えるよ。」と声をかけている（#27）。また、父親がAの気持ちを察して関わってくれたと（#29、30）肯定的に見ている。このような父親の態度の変化は、父親に対するAの態度の変化として父親自身がとらえており（#31）、「Aは少しも変わらない。」（#28）という母親の気持ちを支えている。

Aと弟の関係については、「お兄ちゃんだから。弟がいるから。」（#29）と、Aに言い続けてきたことが、「弟の味方をする。」（#30）と感じさせることになったのではないかと、母親は考えている。弟が自家中毒と診断されたのと同時期に、Aのチックが始まる（#29）。Aは、チックを「何かあると出る。」（#29）、「マラソン大会が嫌だから」（#30）、「ストレスがたまっている。」（#31）と述べているが、あまり気にはしていない。Aには、1年生のころから一時的にチックが出ていたこともあって（#29）、母親もあまり問題視していず、特に面接で取り上げる

ことはしなかった。

第5期は、「Aが何か大変なことをするのはないか。」(#35, 39)という不安を母親が抱えたまま、面接終結へと至った時期である。Aと弟との関係は、「弟の方が負けずにやり返すようになって」(#32, 33), それまでのAからの一方的な攻撃では終わらなくなっている。母親は、「今に暴力が他人に向かうのではないか。」(#33)と不安を語る。

Aのチック症状については、#32, 33, 39で話題となった。学期末の保護者会で、チックが学校では出ていないと担任教諭から言われたことについて、Co.から話題として取り上げると、母親はひどく驚いた様子を見せている(#32)。

チックに関しては、心因性ではないが心理的な影響で変動することが多く、緊張が増加していく時や緊張が解けた時に症状が増加し、精神的に安定している時に症状が減少する傾向がある(太田, 2001)と言われている。太田(2001)は、学校ではチックが目立たないのに家庭ではチックが多いとの訴えはしばしばあるが、家庭に問題があるからではなくむしろ学校のように緊張しないでいられるためであると説明し、緊張や不安だけでなく、楽しいことで気持ちが高ぶった時にもチックは増加する傾向にあると述べている。

#32で母親の見せた驚きは、Aが学校でかなり緊張した状態にあることに気付いた表れではないかと想像される。それは、「知らないうちに気を使っているんだろうね。」(#33)というAに対する言葉かけからも推察される。面接最終回の#39でも、「チックは家ではしょっちゅうある。」と報告されるが、母親はさほど問題視していず、この姿勢をCo.も支持している。太田(2001)は、チック症の子どもを持つ親へのカウンセリングの基本として、親に対して、チック症状を気にしてなくそうとするのではなく、本人の特性という程度に受け止め、子どもの長所を評価し、子どもが精神的に安定できるように心がけるよう援助することを挙げている。本事例では、時間的制約もあり、Aの精神的安定を図るように母親を援助するところまで取り扱うことができなかった。

Aの気分には波があり、母親は「Aに振りまわされてしまって、Aに対して手が出たり、暴言を吐いたり、無視をしてしまう。」(#34)と述べている。#36のエピソードに示されるように、Aはひどく傷つきやすく、一旦傷つくと自己コントロールできず、行動化してしまう。Aにとって、自己の傷つきは、「家をおち壊したくなる。かーっとなったら、窓でも割ってやろうかと思う」(#37)ほどの深さであり、それが、母親に「何か大変なことをするのはないか」(#35, 39)という不安を抱かせることになっていると考えられる。

母親を支援するネットワークとして、家族や地域社会が機能しているかを考えると、父親が積極的にAの養育に関わるようになった事は評価できるが、祖母は気まぐれであり(#34, 35)、地域社会も母親にいろいろと助言はするものの、母親の相談に対しては、「大丈夫と社交辞令の

ように言われ」(#39), 十分機能しているとは言いがたい。柏木(1999)の指摘するように, 心理臨床の問題にジェンダーの視点を取り入れるならば, Aの問題を母親の養育態度に起因すると考えるのではなく, 母親だけによらぬ子どもの養育を支援する場を提供することが必要である。柏木(1999)はまた, 女性にとって同性の友人は家族(夫)以上に強力な精神的絆となると述べており, それは#38の「友人には話せても, 夫には話せないこともある。」という母親の言葉にも示されている。「私の気持ちをわかってもらえなかった。」(#39)という母親を支援するネットワーク作りが, 残された課題となった。

2) 面接過程に見るAの行動の変化

第1期で母親により語られたAは, 幼稚園のころから「気難しい」「感情の激しい」子どもで, 母親にとって「扱いにくい子ども」であった(#1)。幼稚園年長組から小学校2年生まで自家中毒と言われたり, 小学校入学時に瞬きチックが一時的に出たこともあったという(#2)。以後も「目, 鼻, 口など顔のどこかに出る」(#29)ことがあったようで, おそらく, 出たり, 出なかったりを繰り返していたのだろうと想像される。第4期(Aが4年生の2学期)から, チックが再び出たり出なかったりするようになった。第4期におけるチック症状は, 「目をきよろきよろさせるようなチック」(#29)で, 第4期と第5期の間の冬休みには, 消失している。第5期で再び「顔が歪むチック」が出ると報告されたが(#33), #39まで話題に上ることはなく, 症状が出なかったのか, 症状が出ているのに母親が気付かなかったのか, または報告しなかっただけなのかははっきりとしない。

太田(2001)は, 一過性チック障害について, 「チック症は心理的な疾患とされてきたが, トウレット障害を中心にした研究が進み, チックになりやすい遺伝的な素質があることがわかり, 生物学的な基礎のある疾患と考えられるようになっていく。また, 精神薬理学的には, 抗ドーパミン作用の強い薬物が有効であること, 中枢刺激薬によってチックの発症が促進されたり増悪したりすることから, チック症の原因にはドーパミンを中心とする脳内の神経伝達物質のアンバランスが関与していることが指摘されている。」(p.252)と説明している。このように, チック症が生物学的基盤のある疾患であることを考慮するならば, Aの場合, もともと素因的に育てにくい面を持っていたのではないかと考えられる。

第1期では, 「家で自分を出せるのに, 何故外で自分を出せないか不思議に思う。」(#4)と, 家庭外の世界でAが自己表現しにくいことも報告された。ただし, Aの家庭内における自己表現は, 感情を行動化するという未熟なものであり, それは主として弟に対する暴力行為や暴言として現れている。また, 第4期からは, チックに示されるように, 感情を身体化することが加わっている。その一方で, 第2, 3期で話題となる「腹話術の人形」に象徴されるように, A

は自分の気持ちを代弁してくれる何かを求めているのだろう。感情を言語化するという、より高次の発達レベルの自己表現も、第2期から少しずつ現れて来た。例えば、第2期で、弟に暴言を吐くことを母親に注意されたAが、「人が家へ来たり、よそへ行くと気分がハイになる。」(#5)と、自分の気分と行動(暴言)との関係を言語化している。第3期では、弟の友達Dに対して暴言を吐いたり暴力を振るったことについて「僕はあのときのことを忘れそうだ。」と述べたり(#11)、自分のことを「気持ちがこけている」と表現する(#12)。さらに第4期では、カウンセリングへ行く母親から一週間の様子を聞かれ、「悪かったと思う。弟を叩いたりせんと思うんじゃないけど叩いてしまう。」と自分の行動を振り返ることもできるようになってきた。宮下・大野(2002)は、「暴力」行為を行う子どもへの対応として、自分の気持ちを言語化させ、自己と向き合わせることの重要性を指摘している。Aは少しずつ自分の気持ちを言葉にできるようになっており、その点に関しては、母親も「1、2年のころはしゃべってくれなかったが、自分の思いを口に出してくれるようになり、他人に対しても少しは心を開くようになったと思う。」(#35)と認めている。

家庭外におけるAの行動の変化を見ると、近所の人から「ものを言わない子」「変わっている子」と言われていた(#4)Aが、第2期では、祖母からの電話に出て受け答えをしたり、近所の親戚から話しかけられると返事をする(#5)、Aの同級生3人と一緒に遊ぶ(#8)など、少しずつ外の世界と関わりを持つようになっていく。同級生に対する関心は、第3期で、同級生の持ち物と自分の物を比較し、同じような物を欲しがること(#13)や、クラス中で盛り上がっている話題に付いて行かず、黙っていると母親に話したこと(#17)に見ることができる。#32で報告された担任の「以前よりは自分を出せるようになってきた。絵がうまく、友人から一目置かれている。」という言葉に示されるように、第4期における学校場面でのAの自己表現は、絵画によるものであった。この時期、家庭では、一緒に遊んでも同級生に遠慮してサービスしてしまうAの姿が見受けられ(#25, 29)、同級生と対等に付き合えないAのセルフ・エスティームの低さをうかがわせる。そのようなAにとって、絵画は同級生の間での自己評価につながっていると考えられる。同級生の方が自分より良い賞を取ったことへのこだわり(#27)は、このことを裏付けている。

第5期になると、Aは学校では、新しい斑に馴染もうと努力して、かなり緊張して過ごしているが(#33)、学校行事という非常に緊張感の高まる場面においても、皆の前で挨拶をすることができた(#39)。この時期においても、Aの感情の起伏は激しいが、感情を行動化したり、身体化しながらも、言語化できるようになったと思われる。母親は、「気分のむらが出てきた。」(#35)と述べているが、これは、Aが感情を時にはコントロールすることができるようになったことの現われと考えることもできるだろう。実際、近所の人から「Aが変わったね。しっか

りしてきた。」と言われている。このように、母親にとって、近所の人からAのことを肯定的に評価されることは、母親をサポートする場を提供するだけでなく、Aのセルフ・エスティームを高めることにもつながると考えられる。Aの発達を促進させる環境として、家庭環境を含めた地域社会をどのように機能させるかが、今後の課題である。

5. おわりに

本事例は、最初から面接期間が限定されていたために、終結事例と言うよりはむしろ中断事例であるように Co. には感じられる。しかしながら、母親が制限された期間ではあったがカウンセリングを受けたことは、Aの発達にとって非常に有効であったと感じている。母親がカウンセリングに通うことで、父親もまた自分とAとの関係を見つめ、積極的に子育てに関わろうという姿勢が現われ、子育てに奮闘する母親をサポートすることになった。今日の社会状況において、子育てに関して、親をサポートする場を提供することは非常に重要であるが、本事例においては、時間的制約のために、今後の検討課題として残された。

本事例の公表に関しては、母親の承諾を得ており、プライバシー保護のため部分的に修飾を加えている。公表を快諾していただいたAの母親に深く感謝をしたい。また、Co.も同じ女性として母親として、Aの母親の子育てに対する真摯な姿勢に学ぶべき点が多かったことを付け加えておきたい。

6. 文 献

- 1) 柏木恵子 発達心理学とジェンダーの視点から 日本家族心理学会編 家族心理学年報17 こころのパニック―家族臨床と危機への介入 金子書房 187-192 1999
- 2) 宮下一博・大野 久(編著) キレル青少年の心 北大路書房 2002
- 3) 太田昌孝 一過性チック障害 精神科治療学 16(増) 249-254 2001